今週の
倫理

2025. 1. 25～1. 31

1422号

1月のテーマ　｜　決断する

「経営の縦軸」の確立が活路を切り開く

近年、感染症の蔓延をはじめとする不測の事態が様々な分野に影響を及ぼし、その度に多くの経営者が難しい決断を迫られています。こうした状況は、「経営とは何か」を考える絶好の機会でもあります。

本稿では、「決断の拠り所とは何か」という点について考えていきます。まず、「経営」という言葉を「経」と「営」の二つに分けて、それぞれのイメージを見てみましょう。

「経」からは、経験、経過、経緯などの大きな時間的な流れが浮かびます。これを経営の縦軸とすると、「営」は営業、営利、運営など、目の前の活動を指し、経営の横軸にあたります。

「営」は技術や方法を示し、時代や業種によって変わるものです。一方で、「経」は業種や地域、時代を問わない不変・普遍の原理原則を指し、経営の縦軸となります。

▼

判断と決断、同じように使われることもありますが、この二つの言葉には異なる側面があります。

「判断」は、辞書によると「物事の内容やあり方、価値などを見比べ、真偽などを考え決めること」とあります。これは、前例やデータなどの比較・検討する対象があり、それを基に決めることを指します。

社内でノウハウが蓄積・共有されている事柄は、判断材料や基準となります。日々の業務の判断は、できる限りスタッフに任せるとよいでしょう。責任を持って判断する経験を通じて人材が育ち、会社も成長していきます。

一方、「決断」は辞書で「意志をはっきり決めること」と定義されていますが、何に基づいて決めるのでしょうか。時には経験したことのない困難に直面したり、先行きが不透明だったりすることもあります。そのような状況でも、経営者は決断をしなければなりません。

何が正解かわからない中で方向性を決めなければならない時、事業の命運を左右する難しい決断をする際の柱となるのが、経営の縦軸なのです。

個々にあてはめれば、仕事を続ける中で見出された叡智や経営哲学を明文化した理念や指針がこれにあたります。それに基づいた決断によって幾多の困難を乗り越え、経営の原理原則を確立してきたのではないでしょうか。

決断を迫られた時に「創業の精神に立ち返った」、「何を目指して経営してきたのか、何が原動力だったのかを再確認した」という経営者が多くいます。経営の原理原則は不変と言われますが、決断の際に確認し、危機を乗り越え、経営者として成長することで、これがより深まっていくのです。

荒波を乗り越えて大海原を航海するには羅針盤が必要なように、経営者の決断には拠り所となる、こうした経営の縦軸の確立が不可欠です。

苦境にある時こそ、経営者は自身の原点を確認し、果敢に決断して、活路を開いていきたいものです。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局